

アメリカ文学における笑いとその戦略

——スラップスティック、オートマティズム、キャンプ、 ポストアイロニー

司会・講師 山本秀行（神戸大学）
講師 牧野理英（日本大学）
講師 古木圭子（京都学園大学）
講師 麻生享志（早稲田大学）

文学にとって、笑いが重要であることに異論を唱える者は少ないだろう。とりわけ、アメリカ文学においては、笑いやユーモアを愛する国民性も相俟って、Mark Twain を筆頭に、Ambrose Bierce、Sherwood Anderson、Truman Capote、Joseph Heller、James Thurber、Phillip Roth など、笑いをその文学的特徴とするアメリカ人作家は枚挙にいとまがない。

しかしながら、我々文学研究者が学術的に笑いについて論じることは非常に難しい。まず笑いを論じることの難しさについて言えば、その作者とその帰属集団の特性や固有の文化との間が不可分で、作者の帰属集団の部外者である研究者がそれを論じようとする際に、十分に理解できなかつたり、あるいは誤解してしまつたりする危険性をはらんでいる。何より笑いについて真面目に論じることによって、その論が優れたものであればあるほど、笑い自体を「笑えないもの」として台無しにしかねないという逆説的な状況が生じる。それゆえ、アンリ・ベルグソンの笑いに関する哲学的考察、ミハイル・バフチンのラブレー論における民衆に開かれた「カーニバル的笑い」に関する考察など、一部の例外を除いて、これまで笑いは真面目な研究対象とはされてこなかったように思われる。さらに言うなら、ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』において中世イタリアの修道院で起こる謎の連続死を引き起こしたものが、キリスト教的教義と齟齬をきたすアリストテレス『詩学』第二部「喜劇論」の現存する唯一の写本であつたように、ときとして権威や秩序を攪乱しかねない笑いは、論じることすら危険な存在であつたのである。

本フォーラムでは、こうした笑いに関する学術的背景を4人のパネリストが十分共有した上で、それぞれが取り上げる作者・作品における、スラップスティック、オートマティズム、パロディ、キャンプなど、戦略としての笑いに焦点をあて、アメリカ文学を笑いという点から「真面目に」再考してみたい。

エスニック・マイノリティの文学的戦略としてのスラップスティック

ユダヤ系作家 Kurt Vonnegut は、その小説 *Slapstick or Lonesome No More* (1976) をサイレント映画時代に活躍した二人組のスラップスティック・コメディアン、ローレル&ハーディに捧げている。そもそもスラップスティックとは、ヴォードヴィルなどの大衆芸能の中で使われた、殴ると先割れの先端部分が大きな音を立てる木棒のことであるが、転じて、ときに暴力も伴う馬鹿げた動作にナンセンスな言葉を発し、権威や権力を批判したり、秩序立った世界を攪乱したりすることによって笑いを生じさせる「ドタバタ喜劇」を指すようになった。重力変動や疫病流行によって終末を迎えつつある世界の中で、ミュータント的双子の片割れとして生まれながらも、その人並外れた知能と強運によって数々の試練を乗り越え、「最後のアメリカ大統領」となった Dr. Wilbur Daffodil-II Swain の「ドタバタ喜劇」的数奇な人生をローレル&ハーディよろしく双子の姉 Eliza とのコラボレーションでコミカルに描き、人間の営みじたい所詮「スラップスティック」にすぎないという痛烈な文明批判を表明している。本発表では、こうした Vonnegut 的「スラップスティック」が、アフリカ系作家 Ishmael Reed やアジア系作家 Frank Chin にも通じる、エスニック・マイノリティの文学的戦略であることを指摘し、その狙いについて考察したい。

(山本秀行)

日系アメリカ人作家の文学における Bartleby 的笑い ——ベルグソンの Automatism をめぐって

本発表では、19世紀アメリカ作家 Herman Melville の作品を意識し、自身の作品に投影した日系アメリカ人作家に焦点を絞り、その作品にみられる「笑い」の構造を考察する。アンリ・ベルグソンによると笑いとは、ある人物の習慣や型にはまった際に取りうる自動人間的なぎこちない「こわばり」の中に存在するという。アメリカ文学においてこのベルグソンの笑いを文学作品として具現化したのは、Melville の短編小説 “Bartleby, the Scrivener”(1853) であろう。そして日系アメリカ文学においてこの Bartleby 的笑いに着目したのが、Hisaye Yamamoto であり Karen Tei Yamashita である。ベルグソンが提唱する Automatism、すなわち自動人間的こわばりに留意することで、これらの日系アメリカ人作家がエスニック文学に通底するプロテスト的言説とは一線を画するナラティブを示唆していることを証明していきたい。

(牧野理英)

Tennessee Williams と Edward Albee の戯曲にみる劇的戦略としての笑い ——キャンプ、パロディ、自虐性

Edward Albee の *Who's Afraid of Virginia Woolf* (1962) には、Tennessee Williams の *A Streetcar Named Desire* (1947) のセリフが、George と Martha 夫妻の「ゲーム」の小道具としてパロディ化されている場面がある。また、Williams の *And Tell the Sad Stories of the Death of Queens...* (2004) に登場するドラァグ・クイーンのカandyは、洗練された言葉使い、衣装への執着、室内装飾の才能などにおいて、*Streetcar* の Blanche の美学を踏襲しているが、意中の男性に殴られて「死んだ」と思われたものの、不意に息を吹き返す終幕では、その滑稽さが露呈する。女性的立ち居振る舞いを取り入れ、さらにそれに磨きをかけることで、「女性よりも女性らしく」自己を演出しようとする彼女の姿勢には「キャンプ」の要素が顕著である。しかし、自身の過去の戯曲をパロディ化する試みには、劇作家の自虐性も含まれていると思われる。そこで本発表では、Tennessee Williams と Edward Albee の戯曲におけるパロディおよび「キャンプ」の要素を分析し、両劇作家の劇的戦略としての「笑い」について考察を試みる。 (古木 圭子)

ポストモダニズムからポストアイロニーへ——Pynchon 再読

ポストモダニズム以降の時代を“late postmodernism”、“post-postmodernism”または“digimodernism”と呼び、新たな時代区分を見出そうという動きがある。なかでも“new sincerity”の異名をもつ「ポストアイロニー」(“post-irony”)なる概念が近年注目を集める。

アイロニーといえば、ロマン派以降の文学や新批評において重要な役割を果たしてきた概念であるが、その批判的精神はポストモダニズム文学にて完成し、今では陳腐化するほど大衆化したと言われる。いわば自らのクリシェとなったアイロニーの役割を再度問い直したのが David Foster Wallace らポスト・ピンチョン世代の作家であり、その解釈に援用されるのがポストアイロニーという概念である。翻って、この概念が Pynchon 作品に辿れるのかを検証するのが本発表の目的である。また、ポストアイロニーがポストモダニズムに代わる時代の枠組みであるのかも併せて考察する。 (麻生 享志)